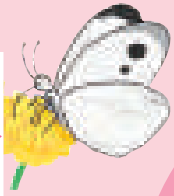




先せつと行事を楽しむずかて

春




春のあそび、工作、りょうり



監修 長谷川康男



 岩崎書店



ひなまつり

●時期 3月3日

ひなまつりは、五節句のひとつで、上巳の節句、桃の節句ともいわれます。

ひな人形をかざり、ちらしずしやひなあられを食べて女の子の健康としあわせを願います。



ひな人形のかざりかた(七だんかざり)

一だん目 だいらびな(内裏雛)

①男びな…しゃくをもっている。
②女びな…せんすをもっている。
昔は向かって右が男びな、左が女びなだった。
今でも、関西地方では、そのようにかざる家もある。

二だん目 三人かんじょ(三人官女)

③くわえのちょうし(加鉚子)
④さかずき(盃)
⑤ながえのちょうし(長柄鉚子)
だいらびなのお世話をする人たち。

三だん目 五人ばやし(五人囃子)

笛やたいこをえんそうする人たち。

四だん目 ずいじん(隨身)

⑥右大臣 ⑦左大臣
だいらびなをまもる人たち。だいらびなから見て、右にいたるのが右大臣、左にいたるのが左大臣。

五だん目 じちょう(仕丁)

だいらびなの荷物をもつ人たち。

六・七だん目 道具

⑧たんす ⑨長もち ⑩鏡台 ⑪はり箱 ⑫火ばち
⑬茶道具 ⑭かご ⑮重箱 ⑯御所車
よめ入り道具をならべる。

※ちいきによってちがいがあります。

ひなまつりのはじまり

ひなまつりは、平安時代の貴族が、3月3日の節句の日に、自分の心やからだについた悪いものをはらってくれるよう願って、紙の人形を川に流したのがはじまりです。この風習と、貴族の女の子のあいだではやっていたひな人形あそび(ひいなあそび)があわさり、江戸時代ごろから、ひな人形をかざって、ひなまつりをおこなうようになりました。



五節句とは

きせつ(季節)の変わり目や節目を「節句」といいます。なかでも、1月7日の人日の節句(→4巻冬)、3月3日の上巳の節句、5月5日の端午の節句(→P.32)、7月7日の七夕の節句(→2巻夏)、9月9日の重陽の節句(→3巻秋)を「五節句」とよびます。この日には行事をおこない、それぞれのきせつにあった料理を食べたり、健康をいのったりします。



はる 春のしぜん

はる 春の生きものをさがそう

はるは、めざめのきせつです。冬のあいだ、つちのなかでねむっていた生きものが、外に出てきて動きまわります。

はる み むし 春に見られる虫



アゲハチョウ

はねに黄色と黒のもようがある。ストローのような口で、つつじなどの花のみつをすう。

はる み とり 春に見られる鳥



ヒヨドリ

さくらの花や木の実を食べる。おなかには、白いはん点がある。



モンシロチョウ・モンキチョウ

ひあたりのよい場所にいる。モンシロチョウは白色、モンキチョウは黄色の羽をもっている。



ダンゴムシ

ゆびでつつくとまるくなる。

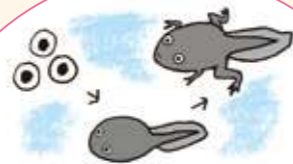
テントウムシ

せなかあかいろくろいろ。背中が赤色や黒色のもの、まだらもようがあるもの、ないものなど、いくつかの種類がある。



かみさつ カエルのたまごを観察しよう

はる 春のたんぼや池で、カエルのたまごが見つかることがあります。



せいちよう カエルの成長

たまごがかえって(ふ化)、おたまじゃくしになり、足がはえてカエルらしくなっていく。

けいちつ 啓蟄

けいちつは、にじゅうしせつき(→P.44)のひとつで、3月5日ごろのこと。土のなかで冬ごもりをしていた虫が、あたたかきせつになって、土のなかからはい出てくるころのことをあらわします。

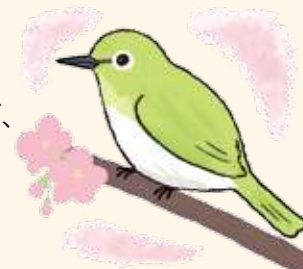
ツバメ

ほそなが細長く、すらりとしたかたちをしている。ながお長い尾をもつ。



メジロ

めのまわりがしろ。あたませなか、頭と背中が、きれいな緑色をしている。



スズメ

とかい 都会でもよく見られる。こめむし、米や虫などを食べる。

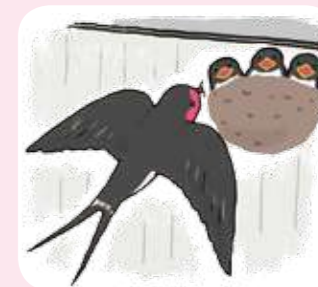


ウグイス

はる 春になると、「ホーホケキョ」というきれいな声で鳴く。「春告鳥」ともよばれる。

いちねん ツバメの一年

ツバメは、はる 春になると日本にやってくる。いえのきしたなどにすをつくり、子育てをします。巣は、どろや草、羽毛などでできていて、春には、巣の材料やひなにあげる虫を運ぶ親鳥のすがたを見ることができます。秋が終わるころ、親鳥は成長したひなといっしょに、南の国へと帰っていきます。



こよみと行事について学ぼう

「こよみ」とは、時の流れを年、月、週、日などで区切って数えられるようにした、カレンダーのことです。昔から、くらしのなかで大切にされてきた、こよみや行事について見てみましょう。

「新れき」と「旧れき」

こよみは、6世紀中ごろに中国から伝わりました。はじめは、月の満ち欠けが1周する時間（約29日半）を1か月とする「太陰暦」が用いられ、その後、太陽の動きも加えた「太陰太陽暦」が用いられるようになりました。しかしこれらは、じっさいのきせつとずれが生じるものでした。そこで、地球が太陽を1周する時間（365日）を1年とし、ずれが少ない「太陽暦」が取り入れられました。現在使われているこよみは、この太陽暦で「新れき」、それまで使われていたこよみは「旧れき」といいます。旧れきから新れきにきりかえたときに、行事の時期も見直されましたが、おぼんなど、今でも旧れきにあわせておこなわれている行事もあります。

二十四節気

「二十四節気」は、太陽の動きを基準に1年を24等分し、季節の変わり目を、天気やしぜんのようにすであらわしたものです。じっさいのきせつとずれがある旧れきの代わりに、農作業のめやすにされました。

二十四節気

行事

啓蟄

新れきの3月5日ごろ

あたたかくなり、土のなかで冬ごもりしていた虫が、外に出てくる時期。



春分

新れきの3月21日ごろ

昼と夜の長さがほぼ等しくなる日。太陽は、真東から出て、真西にしずむ。

3月3日

▶ ひなまつり



春分の日（3月21日ごろ）を中心とした7日間

▶ お彼岸

3月中旬～下旬

▶ 卒業式



二十四節気

行事

清明

新れきの4月5日ごろ

すがすがしく、気持ちのよい風がふき、生きものが生き生きと活動している時期。



4月上旬
▶ 入学式



▶ お花見



穀雨

新れきの4月20日ごろ

農作物を育てる、春の雨がふる時期。農家の人びとは、この時期から、種まきをはじめます。

4月（卯月）

立夏

新れきの5月6日ごろ

こよみの上で、夏のはじまりとされている日。植物がはえはじめ、土が緑におおわれる。

5月2日ごろ
▶ 八十八夜



小満

新れきの5月21日ごろ

生きものや植物が、豊かに育って、大きくなる時期。



5月5日
▶ たんごの節句



5月第2日曜日
▶ 母の日

3月（弥生）

5月（皐月）